

障害の疑いのある外国にルーツを持つ児童への アセスメントに関する課題

企画者 周英實（目白大学保健医療学部言語聴覚学科）
司会者 周英實（目白大学保健医療学部言語聴覚学科）
話題提供者 周英實（目白大学保健医療学部言語聴覚学科）
三盃亜美（筑波大学人間系）
裴虹（筑波大学人間系）
竹内康二（明星大学心理学部）
指定討論者 竹内康二（明星大学心理学部）

KEY WORDS: 障害、外国にルーツを持つ児童、アセスメント

【企画趣旨】

学校基本調査（文部科学省）によると、2019 年の外国人児童は 66,017 人で、2020 年は 71,163 人と前年度に比べて 7%増加している。さらに日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査（文部科学省、2018）では、外国籍の児童 26,092 人が日本語指導を要していたと報告している。

障害のある外国にルーツを持つ児童は、障害のない外国にルーツを持つ児童と同様の環境要因による困難さに加えて、障害特性による困難さを抱えると考えられる。しかし、障害のある外国にルーツを持つ児童に対する支援・指導は十分に検討されていないばかりか、その実態も十分に分かっていない。障害特性を考慮した個々の実態に基づく教育的支援・指導を行うことは急務の教育的課題であると考ええる。一方で、障害が疑われ特別な支援・指導が必要な外国にルーツを持つ児童の中には障害特性による困難さではなく、日本語の問題から波及した学習面や行動面の問題について個別に特別な対応が必要であると考えられる場合もあると思われる。

しかし、外国にルーツを持つ児童が抱えている困難さが障害特性を起因とする困難さなのか、言語や環境要因による習得の遅れなのか、または、両方に起因する困難さなのかを区別することが困難であり、これらの問題を判別するためのアセスメントも確立されていない。

そこで、本シンポジウムでは、実例を用いて上記のように外国にルーツを持つ児童の困難さがどの側面による問題なのかを判別するためのアセスメントの課題について検討することにする。

【話題提供者の趣旨】

1. バイリンガル児童生徒を対象にした学習障害に関するアセスメント実施における課題（周英實、三盃亜美）

第二言語で学校教育を受けているバイリンガル児童生徒は、群で見た場合に、モノリンガル児童生徒よりも、学校での使用言語に関して、音声言語や文字言語の習得度が低い傾向にある。教科学習や読み書きにおける困難さがみられても、言語の低い習得度が原因とみなされ、学習障害のアセスメント実施に至らない、アセスメントを実施したとしても学習障害と判断してよいか分からず、様子を見ることになるなど、学習障害に対応した言語・読み書き指導や支援につながらない、または、つながるのが遅い。本発表では、韓国語－日本語のバイリンガル児童が多く在籍する小学校での語彙・読み書き検査成績に基づいて、学習障害のスクリーニング検査を実施する際の留意事項を述べる。

さらに、学習障害に関する詳細なアセスメントにより、専門的な読み書き指導や学校での支援につながった、学習障害のあるバイリンガル児童生徒の事例を紹介する。その事例を通して、バイリンガル児童への学習障害に関するアセスメント実施における課題を考察する。

2. 特別なニーズがある外国人子どもにも適応する知能検査の方法や配慮に関する実践的検討（裴虹、竹内康二）

特別なニーズがある外国人子どもは学校生活を送る際、様々な困難を生じてくる。子どもの状況や困難さを把握するため、アセスメントを行う必要がある。特に、子どもが学習につまづきがある場合、その困難の原因を明らかにするために、知能検査を実施することがある。しかし、特別なニーズがある外国人子どもは日本語力が低いことや、注意・集中力の足りなさなどによって、知能検査の結果がその子の実際に持つ能力より低くなる可能性がある。

そのため、本研究では、日本語による初回検査で低い点数が得られた外国人子どもに対して、子どもの母国語ができる、かつ知能検査の知識がある通訳者、検査時間の区切りなど配慮によって、再検査を実施した事例を紹介する。検査する際に、日本語で分からない項目を母国語で通訳したり、日本語で回答が難しい場合、母国語で回答してもらう。さらに、検査中子どもの注意・集中を維持するために、検査を 3 回に分けて実施した。検査結果として、再検査では、初回の結果より FSIQ が 30 ポイント上昇した（通訳の妥当性を評価していないので参考値）。その事例より、外国人の特別なニーズがある子どもに知能検査を実施する際、知能検査の知識をもつ母国語の通訳者や、検査時間の区切りなど、など様々な配慮の必要性が考えられる。

【指定討論者の趣旨】（竹内康二）

特別支援教育の現場に関わっている人なら、外国にルーツを持つ児童の行動問題についての見立てで、一度は悩んだことがあるのではないかな。発達の偏りによる影響なのか、言語や文化の影響なのか判断は簡単ではない。言語の影響といっても、教員と児童間のコミュニケーションの問題だけでなく、教員と保護者の間のコミュニケーションの問題が影響している可能性がある。こうした複雑な文脈を踏まえて、専門的なアセスメントをどのように実施すべきか検討する必要があるだろう。

(Ju Yeongsil, Sambai Ami, Pei Hong,
Takeuchi Koji)